東三鷹学園

様式6

平成２８年度　東三鷹学園の評価・検証　結果報告

検証項目	（１）　人間力・社会力の育成 ○他者との適切な関係を構築する力の育成　○他者と共に自己実現を図っていく力の育成　○地域や社会等へ貢献する力の育成　○その他
目標	1、他者との適切な関係を作る力　　2、他者とともに自己実現を図る力　　3、地域貢献する力
取組	1、小・小学校、小・中学校の交流活動を推進して、人間関係を深める。 2－1、キャリア・アントレ教育を推進する。 2－2、TEH（学園生徒会・児童会）を推進し、学園の自治意識を育む。 3、地域行事のボランティア活動等を通して、児童・生徒の心と体の健康づくりを推進する。

成果	課題と改善方策
1. 小・小の交流（5年交流活動、6年合同自然教室・水泳記録会）、小・中の交流（小運動会への中学生のボランティア参加、小6中学校体験・部活動体験、中3と小4の音楽交流、中2の小学校ふれあい体験）は定着し、学園児童・生徒の人間関係を深めている。 2－1. 地域の特色を生かし、地域と連携したキャリア・アントレ教育を推進した。 2－2. 挨拶運動を継続的に実施している。今年度新たに、思いやりの心を育てる活動として「熊本地震募金」「愛のはがき運動」を児童・生徒主体に実施した。 3. 小学校では、地域行事への積極的な参加を推進した。中学校は、地域行事や小学校の運動会等へのボランティアとしての参加を推進した。吹奏楽部、ジュニアバンド、ダンスクラブ等が、ふれあい朝市や農業祭等の地域行事に参加した。	1. 小・小、小・中の交流活動は定着しているが、効果を検証し学園の児童・生徒の人間関係をより深めるように改善していくことが課題である。そのためには、各担当が活動毎に評価していく。 2－1. 活動内容をさらに充実していくことが課題である。また、小・中の系統的なキャリア・アントレ教育を実施していくことが、今後の課題である。 2－2. 成果を上げている挨拶運動の継続と人権・おもいやりの心を育てる取組をさらに推進することが課題である。そのためには、3校担当教員の綿密な連携により、児童・生徒の自治的、主体的な活動にしていく。 3. 小学校では、地域の一員である意識を高めていくことが課題であり、さらに地域行事への参加促進を進める。中学校では、ボランティア活動へのより積極的な参加が課題である。「東三鷹学園スタンダード」を活用して、意識付け・価値付けをして実践に繋げる。

検証項目	（２）　学校運営について ○小・中一貫教育校の学園組織の活性化　○小・中一貫教育校の教員間、学校間の交流の円滑化　○小・中一貫教育校の校務、会議の効率化　○その他
目標	1、教員間、学校間の交流を円滑に推進する。　　2、三鷹市教育研究協力校を推進する。
取組	1、各委員会ごとに、学園のマニフェストの実現のために具体的な取り組みを進める。 2、研究協力校として「ユニバーサルデザイン（UD）を活用した指導方法の工夫と環境整備」を進め、研究発表会を実施する。

成果	課題と改善方策
・マニフェストの実現に向けて三校の教職員が意識を高くもち、各分掌、各学級・学年で組織的に対応した。また、コーディネーターが学園教育課程やカリキュラム、乗り入れ授業、交流活動、学園・学校評価等を行い、効果的な学園運営を行い、教員間の共通理解を図った。 ・10月21日の研究発表会に向けて、UDの視点を取り入れた協議会・事前授業・研究授業を多数行った。その結果、UDの視点に立った掲示や教室環境の整備を行った教員の実施率は、ほぼ100％であった。この研究を通して、学校間の親密さがより増し、教員間の一体感を非常に高めることができた。	・今後もマニフェストにある学力・人間力・社会力をさらに向上させていく必要がある。具体策として算数・数学の基礎コースに毎時間1人はサポート隊を活用し、各教科においては年間30時間サポート隊を活用し、学習環境を充実させていく必要がある。また、家庭学習や補充学習を充実させるために東三鷹スタンダードをより充実させていく。 ・UDの視点を取り入れた授業づくりは今後も継続し学習指導の基盤とし、児童・生徒の各教科における学びを確実なものにする。 今後は道徳分科会をつくり「特別の教科 道徳」について研究していく。また、 指導要領の実施に伴い、全教科で「課題の発見・解決に主体的・対話的に学ぶ学習」に取り組み、研究授業は各教科1回行う。

検証項目	（３）　小・中一貫教育校としての教育活動 ○小・中学校間相互乗り入れ授業　○小学校相互、小・中学校間の児童・生徒の交流活動　○小・中学校教員の合同授業研究等の学園研究会 ○キャリア教育及びそれに基づく小・中の系統性と連続性を明確にした授業実践、授業改善の状況　○その他
目標	1、UDを活用した教育の推進 2、相互乗り入れ授業の充実 3、体力の向上
取組	1、小・中学校の教員の授業研究会を実施し、授業の質的改善に努める。 2、小・中学校間の相互乗り入れ授業を推進する。（数学・体育） 3、9年間を通した体力づくりを推進する。

成果	課題と改善方策
1. 学園合同研究として、昨年度から引き続き「ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業づくり」をテーマに研究を深めた。全教科にわたり授業研究、校内の環境整備を実践した。三鷹市教育研究協力校として研究発表会を開催し、市内外に成果を広めた。 2. 相互乗り入れ授業の計画に対する達成率は、ほぼ100％である。昨年度から引き続き、小から中への乗り入れは中1の数学、中から小へは体育の授業で実施した。算数・数学や体育・保健体育での系統的な指導に繋がるとともに、教員同士の指導方法の交流にも繋がった。 3. 体力テストの結果を学園全体・各校で分析した。サーキットトレーニング、ストレッチ、柔軟体操、持久走等、学園や各校の課題改善に向けた具体的な取組みを実施した。中から小への乗り入れ授業を体育で実施したことで、9年間を見通した体力づくりの推進に繋がっている。	1. 学園研究会での成果を各学級・教科で実践していくことが課題である。ユニバーサルデザインを視点とした授業を日常的に実践し、子どもたちにとって「分かる」「できる」授業づくりを行い、学力の向上を目ざす。また、次年度も学園研究において、全教科での授業改善を推進する。 2. 相互乗り入れ授業をより学力向上に繋げていくことが課題である。そのためには、小・中の教員の連携を深め、指導方法等を質的に改善し推進していく。また、多くの教員が乗り入れ授業に携われるように量的な改善を進めていく。 3. 学園全体で体力調査の結果分析を行い、体力づくりの取組を連携して実施しているが、さらに9年間を見通した活動にしていくことが課題である。体力向上を推進し、系統的な取組を実践できるように、創意工夫していく。

検証項目	（４）　児童・生徒の学力・健全育成 ○　児童・生徒の学習意欲　○　各学年での児童・生徒の学習内容の定着状況（習得、活用、探究） ○　小学校と中学校の評価の一貫性　○　不登校、学校不適応等に関わる児童・生徒の指導・支援
目標　学力	1、基礎学力の定着　2、教員の指導力の向上　3、家庭学習の充実
目標　健全	1、人権と言葉を大切にした指導の推進　2、情報モラル教育の推進
取組　学力	1、確かな学力を一人ひとりに定着するために、個に応じた指導の徹底、ICT機器の積極的な活用、補充授業、学園としてのコンテスト等を実施する。 2、児童・生徒に年2回の授業アンケートを実施し、教員の指導力向上につなげる。 3、家庭と協働して、家庭学習を推進する。
取組　健全	1、いじめ・体罰0を継続する。 2、学園としてあいさつ運動を推進する。 3、学園として規範意識の向上を目ざす。 4、地域・家庭・学校が協働して、情報モラル教育を推進する。

成果	課題と改善方策
学力 1. UDを活用した授業や教室環境、学習規律の徹底を通して、児童・生徒にとって分かりやすい授業が進んでいる。基礎学力の定着をねらいとした、中学校でのJEM（国・英・数）と小学校でのJM（国・数）コンテストが継続的に実施できるようになった。 2. 生徒による評価である「授業が分かりやすい」では、肯定的評価が9割弱になり、「学習したことが身についている」の項目は8割を超え、昨年度より着実に向上した。UDを活用した授業改善の成果の一部と考える。 3. 学園スタンダードの配布方法を通知表・あゆみにセットにしたことにより、保護者への意識を高めることができた。	学力 1. ICTの性能や数量の不足はあるが、活用方法の工夫をより進めていく必要がある。ICT活用の実践を公開し、指導方法の共有化を進め改善を行う。基礎学力の定着をねらいとするモチベーションを高める課題提示の方法やコンテストの問題を見直し精査を行う。 2. 学力や努力が教員から認められているという有用感が8割に達していない。自己有用感を高める言葉がけやデータの示し方など、フィードバックを積極的に改善していく。 3. 周知は進んだが、活用に関しては不足している。学校と家庭の共通のツールとしての位置づけを明確にし、相互の連携の中で具体的に活用していく。普段からの学習指導場面で、意識づけを行う。
健全育成 1. いじめアンケートや生活のスタンダード、日々の指導を通して児童・生徒のいじめを発見・防止することができている。また、スクールカウンセラーの活用により、悩みや問題に適切に対応している。 2. あいさつ運動期間や日々の指導を通して、9割の児童・生徒があいさつの積極的な実行を自覚している。 3. 生徒・児童の時間を守る、忘れ物をしない、きまりを守るなどの生活習慣が身につけている。また、相手に応じた言葉づかいをする意識を高く持っている。 4. 情報モラルをテーマとした教員の学園研修として、電話会社の研修プログラムを受講した。最新の携帯・スマホ・PCの現状を学び、情報リテラシーの向上に努めることができた。	健全育成 1. いじめの早期発見・対応に関して、保護者の肯定的評価は7割程度に止まった。地域・家庭とより連携をし、指導の充実と取り組みに対する理解を進めていく。 2. あいさつに関して保護者の肯定的評価が8割に達していない。学校での取り組み成果の共有とともに、家庭でのあいさつのあり方にもより意識を持ち協力して行う必要がる。 3. 学園スタンダードとリンクさせた意識が低調である。生活と学力の相関性を高めるために、学園スタンダードを共通のツールとした積極的な活用をしていく。 4. テクノロジーの進歩が速く、対応が後手にまわっている。苦手意識を捨て、児童・生徒と同等以上のスキルを追求していく。

検証項目	（５）コミュニティ・スクールの運営 ○　コミュニティ・スクール委員会の組織・運営　　○　保護者、地域住民の学校運営への参画の状況 ○　学校と保護者、地域住民との連携・交流　　○　その他
目標	1、東三鷹学園のスタンダードの充実　　2、サポート隊の充実　　3、CS委員会の活動のPR
取組	1、東三鷹学園スタンダードの活用・充実を図る。取り組みについて熟議を実施し、次年度に改定につなげていく。 2、サポート隊事務局を第六中学校に設置する。 3、カラー版広報誌、HP等を活用する。

成果	課題と改善方策
・東三鷹学園スタンダードは全教職員で共通理解を図り、全学級で実施した。スタンダードを通知表にはさみ、学期ごとに学級だけではなく家庭での振り返りを確実に行わせた。また保護者会等で家庭で掲示して意識を高めるように保護者に活用を促した。 ・あいさつ運動等で地域人財を20名程活用している。また今後、花を植える活動でも地域人財を活用する予定である。 ・カラー版のため、見やすくわかりやすいコミュニティ・スクール委員会便り・スタンダード（学級版・家庭版）・スタンダードガイドを作成し、保護者・地域に配布して活用・啓発を図り、コミュニティ・スクールの活動やスタンダードの活用について広く周知することができた。HPにも10数件掲載することができた。	・教員によって取組内容に温度差があるため、学園全体で家庭・地域・学校が協働して推進していく意識をもたせる。具体策として、家庭や児童・生徒の意識を高めるために家庭学習確認表やスタンダード確認表等を活用し工夫していく。 ・今年、事務局は設置できなかった。発想を転換して、小学校の事務局とは異なる、中学校の実態に合った事務局のあり方を検討し、次年度設置していく。 ・コミュニティ・スクール委員会の取り組みに対する広報は、まだ不足している。広報の内容を活動中心として、もっとわかりやすく伝える工夫、カラー版の発行回数を増やしていく等が必要である。また、学園のHPの中に、CS委員会のHPを立ち上げ充実させていく。口頭による広報活動、紙面による広報活動、HP等の電子媒体による広報活動等それぞれの利点を活かした広報活動を充実させていく。

平成28年度　東三鷹学園の評価・検証結果のまとめ

（１）から（５）の検証結果を踏まえて	１　「小中一貫教育」及び「コミュニティ・スクール」の取組において特によい成果が得られたこと ・三鷹市研究協力校として学園研究発表会を通して、全職員でUDの視点を取り入れた授業づくりや教室・学校環境整備を整え、児童・生徒に学力・人間力・社会力向上を図ることで、小・中一貫教育を大きく推進することができた。さらに学校・教員間の一体感を高め、三校が一つになって学園をまとめ創り上げることができたことは、大きな成果であった。 ・「東三鷹学園スタンダード」の家庭での活用の充実に向けて、コミュニティ・スクール委員会が大きな働きかけを行い、学校・家庭・地域が協働して取り組み成果が上がっている。
	２　今年度に明らかになった課題のうち、特に次年度の重点とすること ・UDの研究成果を今後も日常の授業の中に活かすとともに、児童・生徒の学力向上につなげていく。 ・小学校のサポート隊事務局を充実させ、各教科学習の支援を行う。とくに算数・数学の基礎コースにサポート隊を配置して、児童・生徒の学力向上につなげていくとともに、中学校版のサポート隊事務局を設置していく。 ・東三鷹学園スタンダードの取り組みを今後もさらに継続していく。
	３　「２」の重点課題を解決するための改善策 ・UDを基盤として、次の指導要領改訂の趣旨を教職員に周知・徹底し、学校・学園研究授業を通して実践していく。 ・中学校の事務局は設置に向けて、発想を転換して、小学校の事務局とは異なる、中学校の実態に合った事務局のあり方を検討し、次年度設置を目ざしていく。 ・東三鷹学園スタンダードの取り組みは、3年～5年間の長いスパンで継続して内容、質の向上を目ざしていく。